

COVID-19による地域在住高齢者へのフレイル化の関連論文

作成 日本老年医学会・新型コロナウイルス対策チーム

作成協力：呂玮达 LYU WEIDA（東京大学医学系研究科加齢医学講座・高齢社会総合研究機構）

1. Effect of the COVID-19 Epidemic on Physical Activity in Community-Dwelling Older Adults in Japan: A Cross-Sectional Online Survey (Original article)

J Nutr Health Aging. 2020;24(9):948-950. doi: 10.1007/s12603-020-1424-2.

Yamada M, Kimura Y, Ishiyama D, Otobe Y, Suzuki M, Koyama S, Kikuchi T, Kusumi H, Arai H.

対象者：日本地域在住高齢者

要旨：2020年1月（COVID-19流行前）から、4月（流行中）、6月（第1波の後）までの身体活動（Physical Activity）の変化を調査した。COVID-19の流行により、2020年1月に比べて、4月の総身体活動時間は減少した。このままの状況が続けば、身体活動量不足に伴う身体機能障害といった健康被害につながる可能性がある。

2. Recovery of Physical Activity among Older Japanese Adults Since the First Wave of the COVID-19 Pandemic (Letter)

J Nutr Health Aging. 2020;24(9):1036-1037. doi: 10.1007/s12603-020-1466-5..

Yamada M, Kimura Y, Ishiyama D, Otobe Y, Suzuki M, Koyama S, Kikuchi T, Kusumi H, Arai H.

対象者：日本地域在住高齢者 1,425名

要旨：新型コロナウイルス感染症流行（第1波）の前後（1月－4月－6月）に身体活動量の変化についてインターネット調査を行った。多くの高齢者がCOVID-19パンデミックで低下した身体活動量が改善していた。しかし、一人暮らし及び社会的に不活発な高齢者はその回復が認められなかった。そのような高齢者は、身体活動量が改善しにくい傾向にあることが懸念される。

3. Self-Reported Impact of the COVID-19 Pandemic on Nutrition and Physical Activity Behaviour in Dutch Older Adults Living Independently (Original article)

Nutrients. 2020 Nov 30;12(12):3708. doi: 10.3390/nu12123708.

Visser M, Schaap LA, Wijnhoven H A H.

対象者：オランダの地域在住高齢者 1,119名

要旨：COVID-19パンデミックが栄養状態と身体活動行動に与える影響を調査した。身体活動量の減少と、食習慣の悪化がみられた。特に、85歳以上の女性、独居の高齢女性、およびコロナ前にBMI < 22 kg/m²や身体機能制限のある高齢女性は、身体活動量減少と食習慣の悪化が顕著であった。よって、COVID-19では低栄養、フレイル、サルコペニア、身体機能障害（disability）の発現を加速させる可能性がある。

4. Relationship Between Dietary Variety and Frailty in Older Japanese Women During the Period of Restriction on Outings Due to COVID-19 (Original article)

J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci. 2020 Dec 2; gbaa218. doi: 10.1093/geronb/gbaa218. Online ahead of print.

Otaki N, Yano M, Yokoro M, Tanino N, Fukuo K.

対象者：日本地域在住女性高齢者 253名

要旨：コロナによる外出制限期間中の地域在住高齢者における食事摂取多様性とフレイルとの関係性を検討した。コロナの影響により引き起こされた自粛の間に、フレイルと食品摂取多様性低下との強い関連性が認められた。コロナ禍での今後のフレイル予防のために、地域在住高齢者の食品摂取多様性に対して、中長期的な変化を継続的に評価することは重要である。

5. Home-Based Resistance Training for Older Subjects during the COVID-19 Outbreak in Italy: Preliminary Results of a Six-Months RCT (Original article)

Int J Environ Res Public Health. 2020 Dec 19;17(24):9533. doi: 10.3390/ijerph17249533.

Vitale JA, Bonato M, Borghi S, Messina C, Albano D, Corbetta S, Sconfienza L M, Banfi G.

対象者: イタリアの無作為化試験 (RCT) 実験群 5 人、対照群 4 人

要旨: コロナ禍の自粛生活において、健康な高齢者に対して、筋肉と身体能力に対する 6 ヶ月の在宅トレーニングプログラムの効果を評価した。その介入により下肢筋力が向上したが、筋肉量と組成(fat mass and lean mass)に対しては効果が見られなかった。筋肉の減少及び筋肉機能の低下を予防するために、特にコロナ禍で、高齢者は自宅でレジスタンストレーニングを行うことが不可欠である。

6. Physical and Mental Health of Older People while Cocooning during the COVID-19 Pandemic (Original article)

An International Journal of Medicine. 2021 Jan 20; hcab015. doi: 10.1093/qjmed/hcab015.

Bailey L, Ward M, DiCosimo A, Baunta S, Cunningham C, Romero-Ortuno R, Kenny R A, Purcell R, Lannon R, McCarroll K, Nee R, Robinson D, Lavan A, Briggs R.

対象者: アイルランドの 150 名の外来医療サービスに参加している地域在住高齢者

要旨: コロナ禍の地域在住高齢者において、健康状態の経過と医療利用状況を明らかにした。約 40% の高齢者は、精神的健康が「悪化」または「はるかに悪化」したことを報告した。また、40% 以上の高齢者が身体的健康の低下を、約 70% の人が運動の頻度が低下した。そして約半数の高齢者は生活の質 (QOL) も低下した。今後も数ヶ月にわたるさらなる自粛要請及び活動制限の可能性を考えると、社会的関わりの維持、孤独リスクへの心理的管理、身体活動の継続、医療とリハビリテーションサービスへアクセスするための明確な方針と高齢者へのアドバイス等が優先されるべきである。

7. Association between frailty and changes in lifestyle and physical or psychological conditions among older adults affected by the coronavirus disease 2019 countermeasures in Japan (Original article)

Geriatr Gerontol Int. 2021 Jan;21(1):39-42. doi: 10.1111/ggi.14092. Epub 2020 Nov 17.

Shinohara T, Saida K, Tanaka S, Murayama A.

対象者: 日本地域在住高齢者 856 名

要旨: 2019 年のコロナウイルス感染症対策の影響を受けた日本地域在住高齢者において、フレイルとライフスタイルの変化および身体的または心理的状态との関連を明らかにした。非フレイル高齢者と比較して、フレイル高齢者は日々の身体活動量、下肢筋力、および食事量が有意に減少し、主観的な下肢の力はフレイルと負相関があった。2019 年のコロナの影響によって影響を受けた主観的なライフスタイルの変化はフレイルと関連し、特に、下肢筋力低下に気付いていた高齢者においてはフレイルになる可能性が高いことが示唆された。

8. Depressive Symptoms, Fatigue and Social Relationships Influenced Physical Activity in Frail Older Community-Dwellers during the Spanish Lockdown due to the COVID-19 Pandemic (Original article)

Int J Environ Res Public Health. 2021 Jan; 18(2): 808. Published online 2021 Jan 19. doi: 10.3390/ijerph18020808.

Perez LM, Castellano-Tejedor C, Cesari M, Soto-Bagaria L, Ars J, Zambom-Ferraresi F, Baro S, Diaz-Gallego F, Vilaro J, Enfedaque MB, Espi-Valbe P, Inzitari M.

対象者: フレイルに該当しているスペインの地域在住高齢者 98 名

要旨: 身体活動レベルに対するロックダウンの影響を評価し、地域在住のフレイル兆候をもつ高齢者における十分/不十分な身体活動の予測因子を明らかにした。ロックダウン前後の身体活動量を測定し、ロックダウンにより、約三分の一の人は身体活動が不足になり、抑うつ症状と疲労感の出現が十分な身体活動を維持できない方向へ誘導し、一方で、ソーシャルネットワークと読書は身体活動を維持することに寄与した。また、一人暮らし (独居) は身体活動レベルの低下と関連していた。ロックダウン前のメンタルヘルス、フレイルに関連する症状、および社会的関係 (つながり) は、ロックダウン中の身体活動レベルおよび身体活動レベルの変化量と一貫して関連していた。

9. Relationship of Decrease in Frequency of Socialization to Daily Life, Social Life, and Physical Function in Community-Dwelling Adults Aged 60 and Over after the COVID-19 Pandemic (Original article)

Int J Environ Res Public Health. 2021 Mar; 18(5): 2573. Published online 2021 Mar 4. doi: 10.3390/ijerph18052573

Shimokihara S, Maruta M, Hidaka Y, Akasaki Y, Tokuda K, Han G, Ikeda Y, Tabira T.

対象者: 日本での 60 歳以上の「CO-OP Kagoshima」という会社員 (地域在住者 342 名)

要旨: COVID-19 の発生後、60 歳以上の地域在住者において、社会化の頻度と日常生活、社会生活、および身体機能との関係に対する横断的調査を行なった。68.1%の人が社会活動の頻度が低下していた。社会活動頻度の低下群により、維持～増加群では、①入浴、調理、排尿と排便、電話の頻度または期間、ゴミの量は増加したが、コロナ前後は変わらなかった、②外食の頻度が増え、コロナ前後の社会生活はあまり変わらなかった；社会化の頻度が低下した人は体重が増え、身体活動量が減らした。60 歳以上の地域在住者において、料理と買い物、外食の頻度の減少は、社会化の頻度の変化と関連していた。社会化の頻度の低下を最小限に抑えるために、一連の日常生活用品に優先順位を付ける必要があることが示唆された。

10. Telehealth Home Support During COVID-19 Confinement for Community-Dwelling Older Adults With Mild Cognitive Impairment or Mild Dementia: Survey Study (Original article)

J Med Internet Res. 2020 May 22;22(5): e19434. doi: 10.2196/19434.

Goodman-Casanova JM, Dura-Perez E, Guzman-Parra J, Cuesta-Vargas A, Mayoral-Cleries F

対象者: スペインの 60 歳以上の地域在住高齢者の中の軽度認知障害または軽度認知症の 93 名を対象。(2020 年 3 月 25 日から 4 月 6 日にかけて電話による介入研究: 介入群 47 名、対照群 46 名)

要旨: テレビを基盤として活用し、健康と社会的支援を提供し、要請に応じて電話ベースの支援も提供した「TV-AssistDem」というサービスを用いて、介入研究を行った。介入群 (n=47) には「TV-AssistDem」の使い方について訓練し、自宅環境で毎日サービスへのアクセスを促した。一方、対照群 (n=46) は通常治療のみを受けた。6 ヶ月と 12 ヶ月後で電話調査を実施し、自粛生活(閉じこもり様の生活)による参加者の健康感と幸福感(Happiness)に対する調査をし、「TV-AssistDem」の効果を検討した。「TV-AssistDem」に参加した介入群は、対象群と比較し、身体的および精神的健康感と幸福感は高かった。逆に、独居の方においては心理的悪影響と睡眠の悪化が大きな危険因子となった。「TV-AssistDem」というサービスは、自宅で高齢者の積極的な高齢化を促進し、介護者の負担を軽減することが実証された。

11. Communication Technology Preferences of Hospitalized and Institutionalized Frail Older Adults During COVID-19 Confinement: Cross-Sectional Survey Study (Clinical Trial)

JMIR Mhealth Uhealth. 2020 Sep 18;8(9): e21845. doi: 10.2196/21845.

Sacco G, Ll eonart S, Simon R, Noublanche F, Annweiler C, TOVID Study Group

対象者: フランスの急性期病棟や長期療養病棟、介護施設に入所している 65 歳上の高齢者 132 名

要旨: COVID-19 パンデミック中に、入院もしくは介護施設に入所している高齢者が、どのような virtual communication mode を好むか、また、自立してコミュニケーションができる高齢者の中でどれだけ virtual support を利用できるのかの割合を明らかにした。さらに、単なる電話とビデオ通話との満足度の比較、高齢者のコミュニケーション手段の選択に年齢と状況(入院と介護施設)が及ぼす影響、等を分析した。急性期病棟に入院している患者は、長期療養施設や介護施設に入所している患者よりも、自立してコミュニケーションを確立することが出来、パンデミック中でのコミュニケーションの経験に満足していた。また全体的に、高齢者はビデオ通話よりも従来の電話通話を好む傾向があった。しかし、その満足度の視点では、選択した方法にかかわらず同様であり、年齢や性別での差異もなかった。逆に、長期療養・介護施設に入所している高齢者では、親族とのコミュニケーションに電話を利用した場合に比べて、ビデオ通話の方の満足度が高かった。以上より、この横断的研究では、フレイル高齢者へのコミュニケーションツールの選択を考えるにあたり、ビデオ通話(動画あり)の有用性も示唆している。

12. Frailty Phenotype of Homebound Montreal Older Community Dwellers during the COVID-19 Pandemic: Results of a Cross-Sectional Population Study (Letter)

J Frailty Aging. 2021;10(2):191-192. doi: 10.14283/jfa.2020.69.

Launay CP, Cooper-Brown L, Ivensky V, Beauchet O

対象者: カナダ・モントリオールの 70 歳以上の地域在住高齢者 879 名

要旨: モントリオールの地域在住高齢者を対象として、COVID-19 の臨床症状及び身体的・精神心理的フレイル状態を評価するツール(ESOGER)を用いて、パンデミック中に家に引きこもった(自粛した)1 か月後の臨床的特徴とフレイル状態を評価した。「非フレイル群」と「身体的フレイル群」、「精神的フレイル群」、「身体的および精神的フレイル群」の 4 群に分けた。「身体的フレイル」の高齢者は、「非フレイル」及び「精神的フレイル」

の人よりも年齢が高く、在宅支援を利用しており、さらに多剤併用でもあった。「身体的と精神的フレイル」の高齢者は、「非フレイル」の参加者と比較してより多くの薬を服用し、「精神的フレイル」のみの方よりもよく在宅支援を受けていた。この結果は、COVID-19 パンデミック中に身体活動が不十分で、身体的フレイルの兆候を持ち合わせる高齢者を対象とする予防的介入を優先的に行うことが重要である。

13. Mental Health Status of the Older Adults in Japan During the COVID-19 Pandemic (Letter)

J Am Med Dir Assoc. 2021 Jan;22(1):220-221. doi: 10.1016/j.jamda.2020.11.023.

Fujita K, Inoue A, Kuzuya M, Uno C, Huang CH, Umegaki H, Onishi J

対象者:日本地域在住高齢者 519 名

要旨: 2019 年 9 月から 2020 年 7 月まで (第 1 波の前後)、COVID-19 パンデミックが地域在住高齢者の精神状態に及ぼす影響を調査したところ、うつ病と無気力 (アパシー) 状態は両方とも大幅に悪化した。75 歳未満の高齢者は GDS-15 スコアとアパシースコアの両方が有意に増加したが、75 歳以上の高齢者は GDS-15 スコアでのみ有意に増加した。COVID-19 パンデミックは、特に 75 歳未満の地域在住高齢者において、うつとアパシー状態を悪化させた。75 歳以上の高齢者はベースラインの身体活動が少なかったため、COVID-19 の影響を受けにくい可能性がある。高齢者および精神的脆弱な方々のメンタルヘルスをスクリーニングし、サポートできるシステムを確立することが重要である。

14. The influence of the COVID-19 pandemic on physical activity and new incidence of frailty among initially non-frail older adults in Japan: one year follow-up online survey (Original article)

J Nutr Health Aging. 2021 (in press)

Yamada M, Kimura Y, Ishiyama D, Otake Y, Suzuki M, Koyama S, Kikuchi T, Kusumi H, and Arai H

対象者:非フレイルの日本地域在住高齢者 937 名

要旨: COVID-19 パンデミックが身体活動とフレイル新規発症率に及ぼす影響を明らかにするために、2020 年 1 月 (パンデミック前) と 2020 年 4 月 (第 1 波中)、2020 年 8 月 (第 2 波中)、2021 年 1 月 (第 3 波中) のそれぞれの身体活動時間及びこの 1 年間のフレイル新規発症率を調査した。第 1 波と第 2 波、第 3 波の間の身体活動時間は、パンデミック前からそれぞれ 33.3%、28.3%、40%は減少し、特に、一人暮らしで社会活動が不活発な高齢者の身体活動時間は大幅に減少していた。また、そのような独居および社会活動不活発な高齢者はフレイル新規発症率も高かった。このメカニズムを理解することは、高齢者の健康状態を維持するために重要である。

15. Balancing infection control and frailty prevention during and after the COVID-19 pandemic: Introduction of the National Center for Geriatrics and Gerontology Home Exercise Program for Older People Home Exercise Program for Older People 2020 (Letter)

Geriatr Gerontol Int. 2020 Sep;20(9):846-848. doi: 10.1111/ggi.13991.

Osawa A, Maeshima S, Kondo I, Arai H

要旨: 運動不足は、高齢者のフレイルやサルコペニアの原因となることが知られている。この度、COVID-19 パンデミック中に外出できない、または社会活動が制限されている高齢者のために、自宅で心身の衰えを防ぐための適切な活動計画を決定するためのフローチャート「HEPOP Flowchart」を提供した (国立長寿医療研究センターからリリース)。流れに沿って、「摂嚥下改善パック」と「栄養改善パック」、「バランス向上パック」、「体力向上パック」、「コグニティブパック」、「不活発予防パック」など高齢者が適した運動・活動パック (セット) を見つけることが可能となる。

16. More Active Participation in Voluntary Exercise of Older Users of Information and Communicative Technology even during the COVID-19 Pandemic, Independent of Frailty Status (Original article)

J Nutr Health Aging. 2021;25(4):516-519. doi: 10.1007/s12603-021-1598-2.

Satake S, Kinoshita K, Arai H

対象者:日本の自立している 75 歳以上の地域在住高齢者 2,304 名

要旨: COVID-19 パンデミックの中でも、ICT を利用している高齢者が健康を維持するために自発的な運動などの健康行動を行う状況を調べるために、横断研究を実施した。75 歳以上の地域在住高齢者において、年齢と性別、多剤併用、低栄養リスク、フレイル状態と関わらず、COVID-19 パンデミックの中でも、ICT を利用している人

は健康を維持するためにより積極的行動を行ったことを示した。

17. The impact of frailty on the relationship between life-space mobility and quality of life in older adults during the COVID-19 pandemic (Original article)

J Nutr Health Aging. 2020;17:1-8. doi: 10.1007/s12603-020-1532-z.

Saraiva MD, Apolinario D, Avelino-Silva TJ, De Assis Moura Tavares C, Gattás-Vernaglia IF, Marques Fernandes C, Rabelo LM, Tavares Fernandes Yamaguti S, Karnakis T, Kalil-Filho R, Jacob-Filho W, Márlon Juliano Romero Aliberti

対象者：ブラジル・サンパウロ在住の 60 歳以上の地域在住高齢者 557 名

要旨：前向き多施設追跡により電話インタビューをベースとして COVID-19 パンデミックの中で隔離生活 (shelter-in-place orders) の日常生活の広さ (Life-Space Assessment) や QOL に対して調査を行った。フレイルは CHS 基準が用いられ、対象者は平均年齢 80±8 歳 (65%女性、33%がフレイル該当)。このコロナ禍で 79%の高齢者が地域での移動制限となり、特に移動制限のあるフレイル高齢者は、非フレイルの方と比較して約 2 倍のリスクで QOL の低下が認められた。

【Review】

18. Preventing Frailty Progression During the Covid-19 Pandemic (Review)

J Frailty Aging. 2020 Jun 6: 1-3. doi: 10.14283/jfa.2020.29.

Boreskie KF, Hay JL, Duhamel TA.

要旨：コロナ禍で、栄養と運動、社会性の 3 つの面からフレイル予防に取り組むことが重要である。

COVID-19 の流行により、2020 年 4 月の総身体活動時間は、2020 年 1 月 (流行前) に比べて減少していた。コロナ禍でのフレイル予防に対して、下記の 3 つの点が重要である：① Social media platform を使用してそれらに関する適切な指示；②適切な栄養とタンパク質、ビタミン D の摂取；③多様な運動法を行うこと、及び座位時間を減らすこと。

19. When COVID-19 affects muscle: effects of quarantine in older adults (Review)

Eur J Transl Myol. 2020 Jun 17;30(2):9069. doi: 10.4081/ejtm.2019.9069.

Moro T, Paoli A.

要旨：コロナ禍での高齢者の自粛生活による骨格筋への影響について検討したところ、高齢者においては、身体的リハビリテーションに対する改善効果が鈍い反応であった。従って、骨格筋機能の低下を改善するために、高強度トレーニングと栄養の組み合わせることが必要である。

20. Studies of Physical Activity and COVID-19 During the Pandemic: A Scoping Review (Review)

J Phys Act Health. 2020 Nov 3;1-10. doi: 10.1123/jpah.2020-0406.

Caputo EL, Reichert FF.

要旨：身体活動と COVID-19 パンデミックに関連するエビデンスを review した。

COVID-19 パンデミックによる身体活動レベルの変化 (低下) が最も研究し評価され、次いでメンタルヘルス問題と身体活動の関連性が研究された。大半のエビデンスは、ソーシャルディスタンスの測定による身体活動レベルの低下も評価し、身体活動を高く保つことが COVID-19 の発生によって引き起こされるメンタルヘルス障害を軽減するのに役立つ可能性がある。

21. Physical and mental health impacts of COVID-19 on healthcare workers: a scoping review (Review)

Int J Emerg Med. 2020 Jul 20;13(1):40. doi: 10.1186/s12245-020-00299-5.

Shaukat N, Ali DM, Razzak J

要旨：COVID-19 パンデミックが医療従事者に及ぼす身体的及びメンタルヘルスへの影響に関するエビデンスを review した。医療従事者は COVID-19 患者にケアを提供する役割があるため、身体的 (発熱と咳、疲労感など) および精神的 (うつ病とストレス、不安など) な健康への影響を引き起こすリスクがあり、特に女性と看護師のメンタルヘルスは大きな影響を受けた。個人用保護具の使用、厳格な感染予防管理、シフト時間の短縮、メンタ

ルヘルスおよび支援サービスの提供などの実施は、健康への影響を軽減するのに役立つかもしれない。

22. Prevalence of depression, anxiety and post-traumatic stress disorder in health care workers during the COVID-19 pandemic: A systematic review and meta-analysis (Review and meta-analysis)

PLoS One. 2021 Mar 10;16(3): e0246454. doi: 10.1371/journal.pone.0246454. eCollection 2021.

Li Y, Scherer N, Felix L, Kuper H

要旨: COVID-19 パンデミック中における医療従事者を対象としたうつ病、不安神経症、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) の最新有病率を明らかにした。中等度のうつ病、不安神経症および PTSD の有病率が高いことを示した。このパンデミック中に、医療従事者のメンタルヘルスをサポートするために、さまざまな介入や取り組みの有効性を生み出し、評価することにもっと注意を払う必要がある。

23. COVID-19 in the geriatric population (Review)

Int J Geriatr Psychiatry. 2020 Dec;35(12):1437-1441. doi: 10.1002/gps.5389. Epub 2020 Aug 26.

Roy J, Jain R, Golamari R, Vunnam R, Sahu N

要旨: COVID-19 を抑制するためにソーシャルディスタンスの基準 (プロトコル) が提示されているが、その実施により、すでに社会的孤立や孤独感を経験している高齢者に対しては、さらに悪影響を受けやすくなる可能性がある。従って、過去の事例をもとに、その弊害を推測し、解決策を提案する。WHO などの組織は、地域から国レベルでのネットワークを提供するために、様々な施策を行っている。COVID-19 パンデミック後 (ポストコロナ) においては、今回の悪影響をより軽減するために、高齢者コミュニティなどの集団に関するデータを収集することが重要である。社会的孤立もしくは主観的孤独感の悪化辞退は、高齢者の孤独や死亡率をさらに著しく増加させてしまう。地域交流と身体活動への参加、高齢者への支援などの対策法が、社会的孤立や孤独感を抑えるための手段である。

24. COVID-19 and older people in Asia: Asian Working Group for Sarcopenia calls to actions (Review)

Geriatr Gerontol Int. 2020 Jun;20(6):547-558. doi: 10.1111/ggi.13939.

Lim WS, Liang CK, Assantachai P, Auyeung TW, Kang L, Lee WJ, Lim J Y, Sugimoto K, Akishita M, Chia S L, Chou MY, Ding YY, Iijima K, Jang HC, Kawashima S, Kim M, Kojima T, Kuzuya M, Lee J, Lee SY, Lee Y, Peng LN, Wang NY, Wang YW, Won CW, Woo J, Chen LK, Arai H

要旨: COVID-19 パンデミック中に、各国の対応や困難さ、及びそれに関連した健康格差の影響に焦点を当ててアジア諸国の検討を要約し、高齢者向けの提言を行った。COVID-19 パンデミックは多種多様な課題を露呈し、アジア諸国が脆弱な高齢者へのケア体制を再設計する機会となるキッカケとなる。パンデミックを含む様々な状態に直面している高齢者の課題に対して、有効かつ安定した (回復力のある) 医療システム体制の整備が急務である。

25. Interventions to reduce social isolation and loneliness during COVID-19 physical distancing measures: A rapid systematic review (Review)

PLoS One. 2021 Feb 17;16(2): e0247139. doi: 10.1371/journal.pone.0247139. eCollection 2021.

Williams CYK, Townson AT, Kapur M, Ferreira AF, Nunn R, Galante J, Phillips V, Gentry S, Usher-Smith JA

要旨: COVID-19 パンデミック中に、シールド/ソーシャルディスタンスをとる手段と、それに関連の深いエビデンスをまとめた。この結果をもとに、最も効果的な介入の種類について、公衆衛生的な政策提言をする。孤独に対する最も効果的な介入は、認知的または教育的要素、あるいは仲間間のコミュニケーションとネットワークの促進のいずれかを含んだアプローチである。しかし、社会的孤立への効果的な介入はほとんど見つからない。この結果に基づいて考えれば、シールド/ソーシャルディスタンスの制約下で実施される無作為化試験が必要である。

26. The Impact of Frailty on COVID-19 Outcomes: A Systematic Review and Meta-Analysis of 16 Cohort Studies (Review and Meta-Analysis)

J Nutr Health Aging. Accepted 2021 Jan 12; <https://doi.org/10.1007/s12603-021-1611-9>.

Yang Y, Luo K, Jiang Y, Yu Q, Huang X, Wang J, Liu N, Huang P

要旨: COVID-19 患者においてフレイル状態の有無がアウトカムに与える影響を調査した。フレイル状態の存在は総死亡率と COVID-19 の重症度、集中治療室への入室、侵襲的人工呼吸器の適用、10 日間以上の長期滞在、などの様々のリスクと有意に関連していた。現在、COVID-19 パンデミック及び医療資源の不足という状況下で、フレイルのスクリーニングにもっと注意を払うことは、COVID-19 患者に対する疾病管理と資源配分に貢献するであろう。